

の目にたつやうには不可、有候、又亂酒に成りてつまりたる人などには、うへを心えて可^レ被^レ入、左様の心得なき人は、いにしへより故實なき人と申候也、又酒の下をして候事は、返々不可然、殊に貴人の御前にては、らうぜきしごくの事也、又貴人下様へ御酌の時、銚子の柄をながく取て御入候也、人によりてかた手にてもいれられ候。○中略

一御酌の人、盃色代之時、盃をぱちと高く、銚子をば少ひきく、引入て持べし。○中略

一まはり酌の事、殊なる事なし、人に盃をさして酌を取べし。

〔松の落葉〕酒のむさほふ三度三獻の事

ひと杯の酒のむを一度といひ、三度のむを一獻といひ、なみゐたる座にてさかづきを一たびめぐらしのむをば一巡といへり、さてもの、儀式に、うるはしくのむは三度と三獻とにぞありける、西宮記一の卷に、藥子嘗^レ之、次供御第三度と見え、大鏡六の卷に、御加茂詣の日は、社頭にて三度の御かはらけ、空にてまゐらするわざなるを、その御時には禰宜神主も心えて、大かはらけをぞまゐらせしに云々とあるなどを見れば、三度は酒のむさほふになん、西宮記一の卷、臣下大饗のくだりには、三獻間客人不動座、四獻以後諸卿起座獻盃と見て、三獻もうるはしく酒のむさほふにぞありける、又同記五の卷、定考のくだりに、三獻後居粉熟飯、數巡後居餅餠と見え、北山抄一の卷、二宮大饗のくだりには三獻後有音樂、數巡之後云々とあるをみれば、三獻うるはしくのみをはりてのち、度々さかづきめぐらすこともありしなり、されどこれも大かたのさだまりはありとしられつ、北山抄に、節會酒巡不過七許巡、而今日及十一巡、王公唱歌擊笏、公宴酒興延長云云と見えたる、酒といふもののめばうれひをわすれ、ぐすりとなるをはじめとして、まじらひのむすびにもよろしく、何くれとよきことおほかるものなれど、ゑひすきてはあやまちもしいで、身の病ともなれば、三度三獻とかぎりたるさほうありしはうべなりけり、酒のみかは、すべてよ